

福井藩主松平家の霊廟建築(4)

南専寺山門

国 京 克 巳*

The mausoleum building of the Matsudaira family who was the lord of Fukui-clan.

The Sanmon in Nansenji-Temple

Katsumi KUNIKYO

This paper deals with a history of the Sanmon in Nansenji-Temple. It is found that the building was built in 1672 (Kanbun 12) as the mausoleum gate of Seitiin in Eihei-ji-Temple who was the wife of Matudaira Mitsumiti, the forth lord of Fukui-clan. The building was transported in section from Eihei-ji-Temple to Nansenji-Temple, and was rebuilt as the Sanmon in 1780 (Anei 9).

■はじめに

大野市下唯野にある杉谷山南専寺は、浄土真宗本願寺派の寺院で、文明七年(1475)頃、井波瑞泉寺三世兼鎮が富田庄唯野村神職阿部正任宅に支坊を創立し、開基したことにはじまる。その後、文亀三年(1503)南専寺と号し、江戸時代初期の第7世賢周のとき新田開拓により現在地に寺地を定め、現在に至っている¹⁾。寺の入口には、曹洞宗大本山永平寺より移築されたと伝えられる山門があり、現在大野市の有形文化財に指定されている。この建物は昭和五十四年に大野市の指定文化財保護補修に対する補助金制度に基づき、修復が行われた。その際、小屋裏から寛文十二年(1672)の棟木銘と安永九年(1780)をはじめとする棟札六枚が発見された。寛文銘は一部の部材にあるだけで、時代様式などから現在の形になったのは安永九年であると推論されている²⁾。しかし、永平寺からの移築に関しては特に言及されていない³⁾。

本稿はこれまで扱われている史料と、福井県立図書館松平文庫の史料や永平寺蔵の『永平寺寺境絵図』⁴⁾を加えて、南専寺山門の前身建物やその由緒を明らかにし、さらに創建年代やこの門のもつ意義などについて考察するものである。

■南専寺山門について

1) 建築形式

山門は正面を北に向け本堂前に位置し、間口2.72m奥行2.26mの禅宗様四脚門(図-1)である。柱は粽付きの円柱で、自然石の礎石に笏谷石製の礎盤を置いた上に建つ。また、柱は腰・飛・

* 建築学専攻

頭貫でそれぞれ固められ、頭貫には龍や菊の丸彫彫刻をほどこした木鼻が取り付けられる。柱上には出三斗の組物を置き、虹梁及び桁を支え、中備には表に装飾的な蓼股を、裏に波や兎の透彫を取り付ける。さらに前後の虹梁と茨垂木天井の間には、蓼股を覆い尽くさんばかりに波や花鳥を題材とした華麗な透彫を施す。破風板や頭貫表面には桐、三ッ葉葵、菊、巻藤の彫刻紋を取り付けている。屋根は銅板葺の向唐破風となり、棟には笏谷石製の棟石と鬼石を置く。内部は虹梁や桁で囲まれる部分を水平の板天井とする。主柱間に繁狭間付きの棧唐戸を吊る。木材は主要部分が檜材で、部材や彫刻に彩色の跡が残る。

2) 従来の建築年代

昭和五十四年の修理工事を設計監理された伊藤貞氏は『南専寺山門修復及塀復旧工事を終えて』⁵⁾で、寛文十二年銘入りの棟木や安永九年の造立棟札が発見されたこと、屋根は以前桧皮葺であったこと、さらに柱の根継ぎ、小屋材、野垂の一部、裏甲、茅負等軒廻り材の一部又大斗、巻斗、妻飾、木鼻彫刻の一部に修理後補のあとが見受けられるとしているのみで、その建設年代については言及していない。一方、高島猛氏は『大野市史 文化財図録編』⁶⁾で、上記報告書と現地調査から「発見資料のうち一番古いものは寛文十二年（1672）の棟木銘文であるが、前述の建築様式や虹梁の絵様より考えると、この門が現在の形となったのは、発見された棟札のうち『奉造立表門一字…』と記された安永九年（1780）であると思われる。」とし、現在の形を安永九年としている。また、吉岡泰英氏は『福井県史 資料編14』⁷⁾において「このうち、安永九年（1780）の棟札には『奉造立表門一字…（略）…棟梁志比庄永平寺之番匠玄之源左衛門』とあって、彫刻装飾を比較的多用する現在の形式となったのは、この時と判断される。しかし、虹梁等の部材には古式な面もみられ、寛文時の部材銘のみられる棟木以外にも残されている可能性も考えられる。」とし、一部の部材に寛文時のものが残るとしながらも、安永九年を山門の主要な建設時期としている。

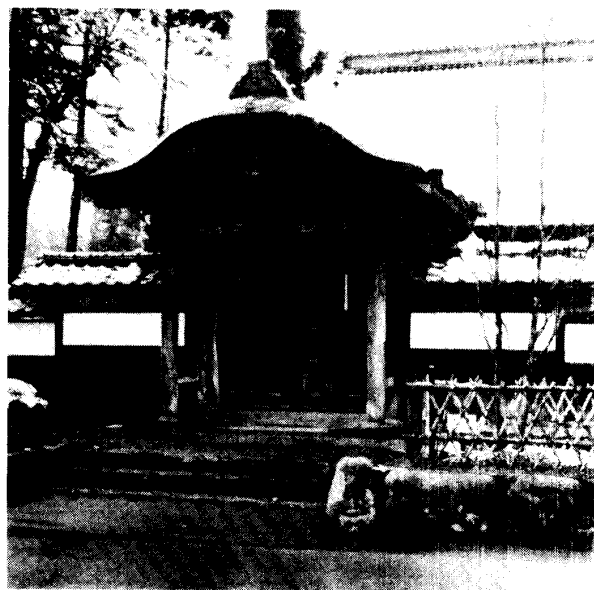


図-1 南専寺山門外観

以上のようにこの山門は棟木銘文資料がありながらも、時代確定の根拠として山門の装飾様式により、寛文の部材を一部に使用しながら、安永九年に現在のような彫刻装飾を多用する建物となったというのが現在の認識である。

■永平寺大安院廟所門

1) 永平寺における向唐門

南専寺山門の由緒については、曹洞宗大本山永平寺より移築されたものとの言い伝えがあることか

ら、その棟木銘文の寛文十二年前後の永平寺関係の建物について検討する。この時期の永平寺で、四脚門が建設されたという記録はみあたらないが⁸⁾、この時期に関する絵図史料に永平寺蔵の『永平寺寺境絵図』延宝四年～天和元年(1676～1681)頃(図-2)がある⁹⁾。この絵図は当時の永平寺の様子を詳細に描いたもので、屋根の形態や仕上げ等建物外観の概略¹⁰⁾が判明するものである。この図から四脚門で、桧皮葺の向唐門と考えられるものを探すと、永平寺山門の東側山肌に接する場所に位置し、福井藩廟所の一角にある清池院廟所門(絵図には廟所名の記入はない)と慶寿院廟所門が考えられる。慶寿院廟所門については、絵図上では欠損してその右半分しか描かれていないが、明らかに桧皮葺の向唐門と考えられる。ここで慶寿院は三代藩主忠昌の室で、万治二年(1659)に死去し、

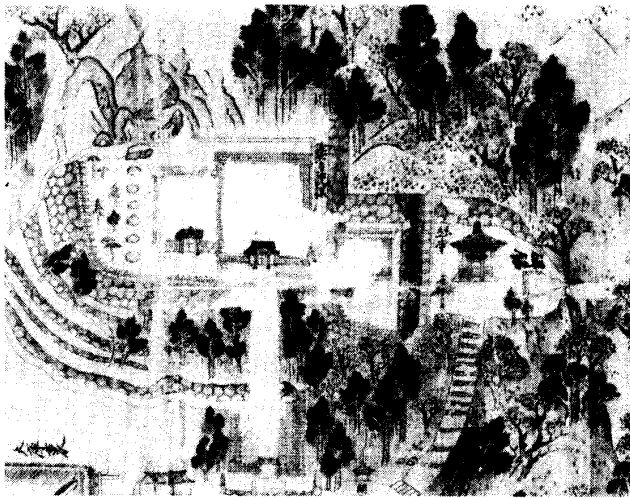


図-2 『永平寺寺境絵図』(延宝四～天和元年) 永平寺蔵

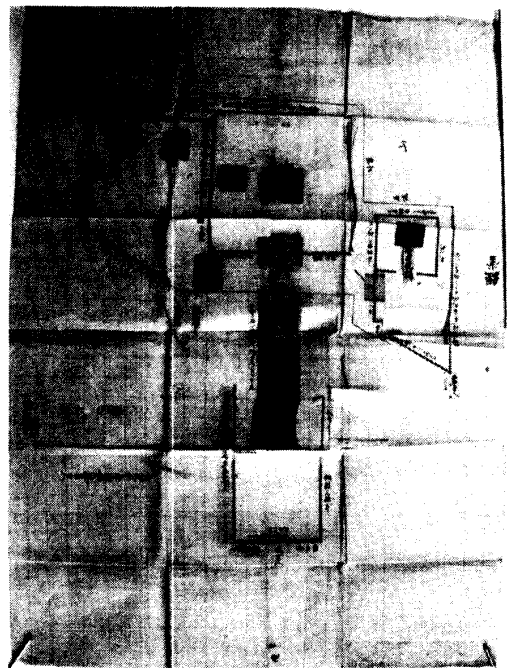


図-3 『永平寺御石塔指図』(安永七年以前) 松平文庫

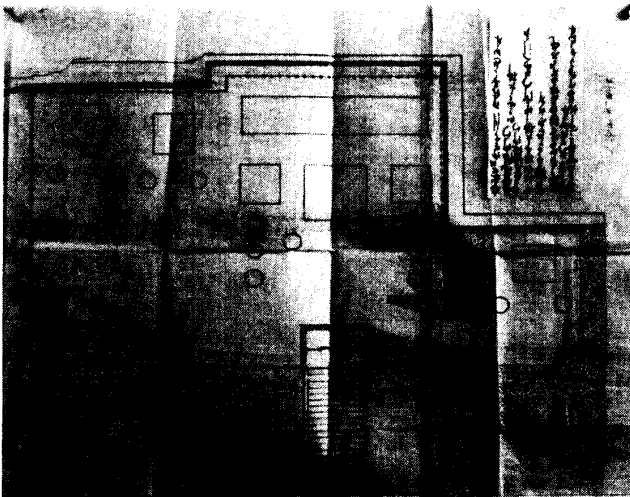


図-4 『永平寺墓所図』(安永七年) 松平文庫

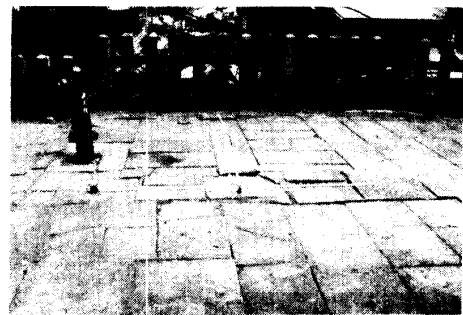


図-5 永平寺大安院廟所門跡

その子四代藩主光通により廟所が建設されている¹¹⁾。一方、清池院は四代藩主光通の室で、寛文十一年(1671)に江戸にて死去し、その後分骨をして廟所が建設されている¹²⁾。

ところで、福井藩の永平寺廟所に関する松平文庫¹³⁾の絵図は数点あるが、その中でも門に関するものは『越前国御寺々御像堂御墓所図』所収の「永平寺御石塔指図」(安永7年以前)¹⁴⁾と「永平寺墓所図」安永7年(1778)がある。「永平寺御石塔指図」(図-3)は七分計の指図で、中央に三代藩

主の隆芳院廟所、その南に慶寿院廟所、北にひとまとまりとなった四代藩主の大安院および清池院廟所を描いている。廟所門は三箇所とも四脚門で、それぞれの廟所入口に設けられている。しかし、『永平寺寺境絵図』と「永平寺御石塔指図」を比較すると、大安院および清池院の廟所形状と大きさ、さらに廟所門位置と向きが異なっている。このことから、「永平寺御石塔指図」の大安院および清池院廟所門（以下大安院廟所門とする）は、安永7年以前に新たに建設されたものか、あるいは清池院廟所門が廟所拡大にともない移築再用されたものが考えられる。また、いずれの門にしてもこの門は、廟所内の隆芳院廟所門や慶寿院廟所門の仕様から考え、桧皮葺（向）唐門の可能性が十分考えられる。

2) 大安院廟所門

安永7年の「永平寺墓所図」（図-4）になると、三廟所門は一箇所となり、その貼付紙には

「安永七戊戌閏七月御絵図之通出来

大安院様御門

式々所共取拂

慶寿院様御門

中仕切欄木取拂中御門前へ引取…」

とあり、前述の大安院廟所門と慶寿院廟所門が安永七年閏七月には撤去され、廟所全体がさらに整備されたことがわかる。このことから不要となった両廟所門が、他の場所に移築されたり、転用される可能性が十分考えられる。前述の「永平寺御石塔指図」から大安院廟所門の寸法を実測すると、間口9尺強奥行7.4尺余の四脚門で、主柱控柱とも丸柱である。また、慶寿院廟所門は間口7尺奥行5尺余の四脚門となり、やはり主柱控柱とも丸柱である。これらのうち南専寺山門の可能性があるのはその門の大きさから考え大安院廟所門である。永平寺の大安院廟所門跡（図-5）の調査によると、笏谷石製の礎石板石には礎盤を礎石と同一材で作り出したものを欠き取った跡があり、礎盤が笏谷石製であったことがわかる。

以上から永平寺に存在した四脚門で、桧皮葺の向唐門で移築される可能性があるものは、大安院廟所建設時に清池院廟所門が再使用されたと考えられる大安院廟所門か、あるいは新たに建設されたと考えられる大安院廟所門のいずれかである。

ところで、大安院廟所門が清池院廟所門として最初建てられたとすれば、清池院は寛文十一年三月江戸で死去しており¹⁵⁾、廟所はその後に造られるのが普通であるから、門の建立年は寛文十一年以後となる。また、『永平寺寺境絵図』にこの門が存在しているので、建立年はさらに狭まり、寛文十一年以後で、延宝四年～天和元年頃までの約十年間となる。一方、新築されたとすると、大安院は延宝二年(1674)に死去しており¹⁶⁾、廟所はその後に造られると考えられるから、建立年は延宝二年以後となる。ところが、南専寺山門の棟木銘文には寛文十二年とあり、時期的に合致する門は最初清池院廟所門として建設されたものが、大安院廟所門として再用されたものとなる。

■移築を窺わせる事項

1) 南専寺山門にみられる痕跡

現在、南専寺山門の破風板と頭貫には桐、三ッ葉葵、菊、巻藤の紋のいずれかあるいは二つが組となって付いている(図-6, 図-7)。このうち、南専寺の紋である巻藤紋は門裏側の破風板や頭貫に付いているが、破風板幅や貫幅より大きく不釣り合いで、安永九年以後に付けられたことは明かである¹⁷⁾。次に菊紋は前方の控柱をつなぐ頭貫の中央にある。形は16弁の菊であるが、中央に5枚の花びらの様なものを彫り込んでいる。大きさは頭貫に風蝕で生じた直径19センチの円形の紋跡より一回り以上も小さい。この紋跡は、菊紋の左右にあって同じ自然条件化の桐紋の周囲にできた風蝕跡の幅と比較すると、著しく大きくなっている。一方、本柱間の頭貫中央に付いている三ッ葉葵紋の直径は18.5センチである。したがって、今みえる菊紋は後補のもので、大きさからみて以前は本柱間にある頭貫につく三ッ葉葵紋と同じ紋が付いていたと考えられる¹⁸⁾。事実、風蝕跡の外周部には、釘

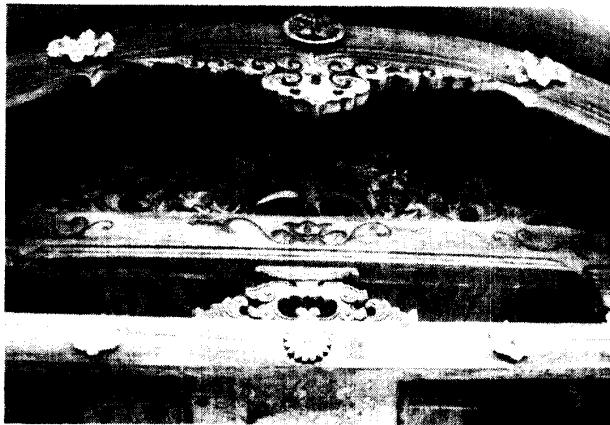


図-6 南専寺山門正面妻部

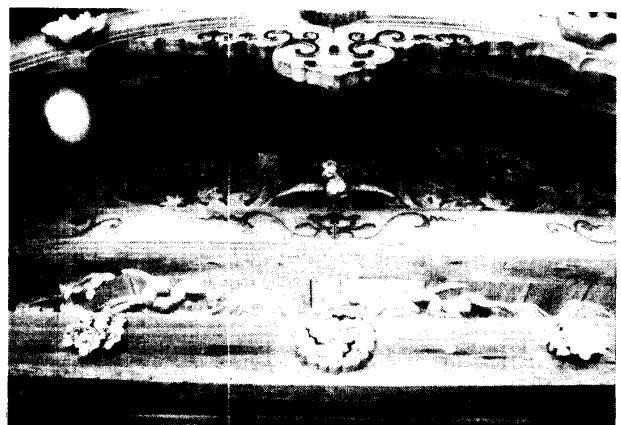


図-7 南専寺山門背面妻部

跡が4箇所残っている。

次にこの桐および三ッ葉葵紋の意味するところについて考える。三ッ葉葵紋が福井藩松平家の紋であることは一般によく知られているが、桐紋については不明な点が多い。紋章事典によると、五三の桐を家紋として使用していること、またこれを福井桐と称することもみえる。ところが、南専寺山門は五七の桐で、同じ桐でもその形が異なっている。この点については『松平直基公記』¹⁹⁾に、福井藩は当初桐紋も三ッ葉葵紋と同様に使用していること、さらに当初使用した桐は五七の桐であることが記されている。このことに従うなら大安院廟所門に五七の桐があったこともうなづけるのである。

ちなみに、高野山に慶長五年(1600)と同九年(1604)に建設された松平秀康の母および秀康御霊屋の扉紋や棟東下部には、五七の桐紋のみが使用されている²⁰⁾。また、大安院廟所門より5年後の延宝五年(1677)頃建設の大安寺霊屋内部欄間にも、五七の桐及び三ッ葉葵紋が一組となり使用されている。この桐と三ッ葉葵紋の同時使用は、福井藩の建築では現在のところ大安寺霊屋を最後に見当たらず、その後は三ッ葉葵紋のみとなっている。このことからみても南専寺山門は建立年代が古いことを示している。

移築に関する部材の痕跡については、前述の修理報告『南専寺山門修復及塀復旧工事を終えて』に

「修理の際に判明した柱の根継ぎ、小屋材、野たるきの一部、裏甲、茅負等軒廻り材の一部又大斗、巻斗、妻飾、木鼻彫刻の一部に修理後補のあとが見受けられる。」とあり、建物一般の修理内容であって、その確証を示すものはない。しかし、柱の根継（左本柱および前面右控柱）²¹⁾が柱内の中空部分（図－8）であり、建物の解体をしなければ出来ないことから、一度は建物が解体されていることを示している。安永九年以後の棟札資料からは屋根葺替の記録しか見当たらず、解体修理は安永九年以前を示す。つまり、山門は南専寺に建てられる前に存在し、それも柱根元が不朽するほど十分以前に建てられていたことになる。

さらに移築の可能性を高くするものとして礎盤と礎石の関係が挙げられる。礎盤は笏谷石製できれいに加工されているのに対して、礎石は偏平な自然石を利用している。礎石に自然石を用いる場合は普通礎盤は木製となるのに、この山門はそうになっていない。一方、大安院廟所門は、前述のように笏谷石製の同一材料で礎石と礎盤が作られ、礎盤より上部が欠き取られている（図－9）。以上のことは礎盤より上の部分が礎石とは別に作られた可能性を示唆する南専寺山門が大安院廟所門であることをさらに裏付ける。なお、大安院廟所門の礎石跡間隔はほぼ前述の「永平寺御石塔指図」より得られる寸法と一致している。

2) 大工について

南専寺山門の棟木銘文には御大工岩崎久右衛門並びに指物大工増村次良三良、斎藤喜右衛門等とある。当時の福井藩主四代光通公の家臣の奉録を記した『大安院様御切米給帳』²²⁾によれば、御大工岩崎久右衛門は御扶持人大工として十石を拝領している。さらに彼は大安寺の大安院霊屋の延宝五年の棟札²³⁾にも大工頭関清助と共に棟梁として名を連ねている。増村次良三良は、同給帳に、増村長右衛門、増村平介、増村藤右衛門が御扶持人大工としてみられ、そのいずれかの増村家一門の一人と思われる。斎藤喜右衛門、山内五右衛門は不明であるが、いずれも藩関係の大工達と考えられる。

寛文十二年亥八月二十八日 被渡仰

御奉行	□□□□ 門	増村次良三良
		斎藤喜右衛門
御大工	岩崎久右衛門並ニ指物大工	山内五右衛門
		此山善角老人
		施主大工

さらに同銘文によると、奉行において工事を行っている。南専寺山門の安永棟札が示すように一般の建築工事で奉行を立てることは考えられず、この点からも福井藩の関与が十分考えられる。これらのことから、寛文十二年建立の山門は福井藩に関係した建物であったことがわかる。

また、南専寺山門の安永九年棟札²⁴⁾にみられる棟梁の玄之源左衛門は永平寺門前大工である。彼が永平寺から南専寺への大安院廟所門の移築に携わっていたことも理解できる。この玄之源左衛門は永平寺門前大工の名主を代々勤める家柄であり、門前大工の祖とされ永平寺開祖道元禪師が宋より帰



図-8 南専寺山門本柱と礎盤取り合い



図-9 永平寺大安廟院所門礎盤跡



図-10 南専寺山門木鼻と虹梁絵様



図-11 南専寺山門基股

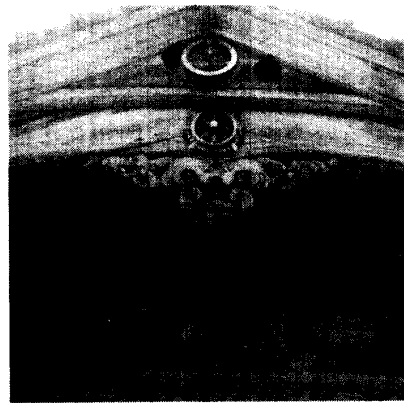


図-12 大安寺本堂玄関基股(万治2年頃)

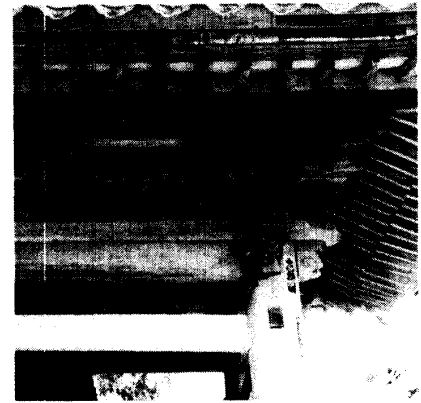


図-13 大安寺鐘樓基股(寛文2年頃)



図-14 大安寺霊屋木鼻と虹梁(延宝5年頃)



図-15 南専寺山門正面中備基股

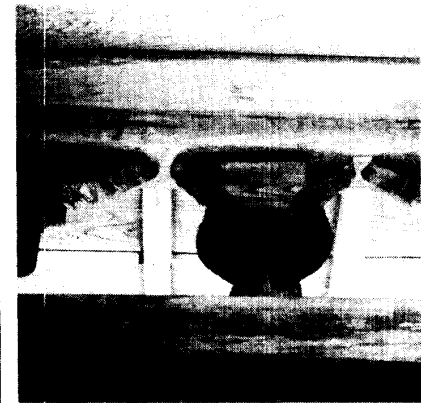


図-16 南専寺山門側面中備と肘木

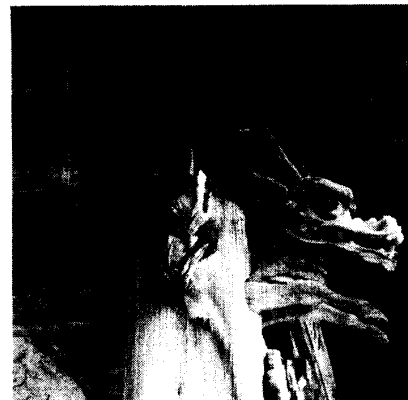


図-17 南専寺山門木鼻の丸彫彫刻

朝した際随伴した玄盛繁の子孫であるといわれている²⁵⁾。南専寺に関係した玄之源左衛門は、現在までに判明している棟札等²⁶⁾によれば、寛延二年(1749)から文政五年(1822)の74年間に活動していた源左衛門師福²⁷⁾の可能性がもっとも高い。

3) 移築時期と移築伝承

「永平寺墓所図」の貼付紙から、大安院廟所門は安永七年閏七月には永平寺廟所から撤去されている。一方、南専寺山門はその二年後の安永九年四月に大部分を完成し²⁸⁾、五月に屋根の桧皮葺を終えている²⁹⁾。したがって、安永七年以後同九年にかけて移築再建されたとみることができる。

南専寺山門は「昔曹洞宗大本山永平寺にあったものが移築された」とか「住職の嫁が嫁入り道具として荷車でもってきた」と言い伝えられている。南専寺山門を大安院廟所門とすれば、大本山永平寺から移築したという伝承は一致する。

また、嫁入り道具という伝承を信ずるなら、嫁とは山門建立の発起人頭で、南専寺住職第拾三世賢明の妻のことを指すとみられる。移築時の住職は第拾二世賢寿で、大谷本山より宗祖の身影安置を仰せ付けられるほどの実力を備えていたようで³⁰⁾、そこへ嫁ぐ嫁の実家は相当の実力者と考えられる。この実力者こそが、永平寺あるいは福井藩と何らかの関係があり、譲渡されたものと思われる。

5) 建築様式

建築細部の様式は、龍や菊の丸彫彫刻がなされた頭貫や、虹梁と天井の間を埋め尽くさんばかりの透彫彫刻により装飾されている妻面などから、全体的印象は江戸時代後期の建物のように考えられている。しかし、肘木や木鼻(図-10)そして透彫彫刻と一体となった墓股の形態(図-11)やそれらの絵様は、安永頃の福井県内の社寺建築のものとは古風で、万治二年(1659)頃の大安寺本堂玄関墓股³¹⁾(図-12)、寛文二年(1662)頃と同鐘楼墓股³²⁾(図-13)や延宝五年頃の同霊屋³³⁾の肘木や木鼻そしてその絵様(図-14)により近いものとなっている。また、正面の虹梁と頭貫間の中備墓股(図-15)のように江戸時代後期を感じさせるものもあるが、これは創建当初からのものでなく、安永の移築時以降に取り付けられたものであることを示すものである。肘木や墓股の形状が他部材と全く異なるうえに、一般に同じ仕様となる門背面の同位置にはその墓股がなく、兎や波の透彫彫刻がはめ込められている。さらに、墓股の表面彩色は他部材と異なり弁柄が使用されている。なお、本柱と控柱をむすぶ頭貫上にあるつばみ状の束(図-16)は、地紋彫が唯一施されていて他の部材と異色であり、安永頃とも見られるが、その上部肘木の渦形が柱上肘木と似ており、また安永の頃とみられる墓股上部の肘木と全く異なるので当初材と考えられる。

頭貫の丸彫彫刻(図-17)や妻部の透彫彫刻そしてそれらの彩色が、大安院廟所門当時のものか、移築後になされたものかは確定できない。しかし、一般に彩色は安永頃の福井県内の社寺建築では、外部の彫刻には使われていないことが報告されており³⁴⁾、この山門には葵や桐紋の下端、木鼻、虹梁側面の絵様に金や黒漆が、彫刻には緑、胡粉等の彩色が使用され、安永以降の補修とは考えられない。このこともこの彫刻や彩色が当初のものであることを示している。また、現山門扉は新設のものである

るが、昭和五十四年修復当時には、扉に漆塗や金箔張りの箇所が存在したことが報告されている³⁵⁾。この扉仕様から考え山門が相当の権力者のためにつくられたものであって、一地方寺院の門として改修してできるものではないことも推察される。つまり、彫刻彩色による龍や菊等の豪華装飾をともなった南専寺山門は福井藩の永平寺大安院廟所門がほとんどそのまま移築されたされた寛文十二年頃の建物となる。

■おわりに

以上のように、南泉寺山門は永平寺の福井藩廟所にあった大安院廟所門の遺構であり、それを移築したものであることを検証した。

この門は四脚門形式で、四代福井藩主光通の正室清池院の廟所入口門として、寛文十二年頃に福井藩永平寺廟所に作られ、光通が死去した延宝二年以後に、廟所造成の改変にともない大安院および清池院の廟所入口門として移設された。そして安永七年、廟所全体の改変により取り払われた際、南専寺が譲り受け、山門として安永九年に移築建設されたものである。ただし、この工事は中備や礎石等の細部と屋根葺替が行われた程度であった。

つまり、南専寺山門は、寛文十二年頃の建立で、福井藩が45万石余の石高を有していた時期の建築である。現在その当時の福井藩関係の建築は大安寺に存在するのみで、この建物は福井藩の盛期における貴重な遺構となる。また、福井藩松平家の霊廟建築を知る上でも、ほとんどが幕末に建設された建物であり³⁶⁾、この建物は古い時代に属する遺構となっている。さらに、県内の社寺建築の中で江戸初期の建物が中世以来の伝統的簡素な様式をもつ中³⁷⁾、この建物は彫刻や彩色をともなった豪華なものであり、福井県の建築史の流れに一石を投じるものにもなる。

本研究に際しては、南専寺、永平寺、福井県立図書館、松平家福井事務所をはじめとする関係各位から資料提供や助言を戴きました。これら関係各位に末尾ながら感謝申し上げます。

註

- 1)『大野市史 社寺文書編』所収の「南専寺文書」南専寺由緒記 p565 大野市史編さん委員会 昭和53年 大野市役所
- 2)『福井県史 資料編14』平成元年 福井県,『大野市史 図録文化財編』昭和62年 大野市役所
- 3)『奥越史料 第9号』p1~6 昭和55年 大野市教育委員会 大野市文化財保護委員会
- 4)『永平寺寺境絵図』永平寺蔵 延宝四年~天和元年(1676~1681)頃。なお、この年代についてはさらに遡り、寛文十二年~延宝二年頃と考えられる。詳細は別稿で明らかにする予定。
- 5)前掲3)
- 6)高島猛 「四 南専寺表門」『大野市史 図録文化財編』p383~387 昭和62年 大野市役所 所収
- 7)吉岡泰英 「(4) 主要社寺建築解説」『福井県史 資料編14』p46,47 平成元年 福井県 所収
- 8)『永平寺年表』熊谷忠興著 昭和53年 歴史図書社
- 9)金坂清則 「永平寺寺境絵図」解題32 『福井県史 資料編16上 絵図・地図』平成2年所収
- 10)この絵図では建物外形や桧皮葺、柿葺、石置き板葺、茅葺などの屋根仕上の区別がなされている。

- 1 1)『国事叢記』 福井郷土誌懇談会 昭和36,37年 福井県立図書館 「(万治元)八月十七日 光通君之御母堂於東武御逝去。葬干無量山伝通院。慶寿院殿…」 前掲8)「万治2年 8月17日 松平忠昌の奥方逝く、法名、慶寿院殿…、英峻(嶺巖)、五輪塔の台座銘を撰ず。」五輪塔銘
- 1 2)前掲1 1)「(寛文十一)三月廿八日 光通君室家中将光長卿姫君於国。御逝去。江戸西窪光明山天徳寺に葬。」前掲8)「寛文11年 7月10日 松平光通奥方、清池院の 卒哭忌に相し、永平寺へ分骨し五輪塔を建立す。」五輪塔銘
- 1 3)松平宗紀氏蔵 松平文庫 福井県立図書館保管
- 1 4)「永平寺御石塔指図」については『永平寺寺境絵図』の年代についての考察で合わせて論考する予定である。
- 1 5)前掲1 2)
- 1 6)前掲1 1)「(延宝二)三月廿四日。申刻戌刻共。従四位上左近衛権小将越前守源朝臣光通君清和天皇二十九代御頓死。」
- 1 7)南専寺山門を昭和54年に修理した大工細井氏によれば、修理前には菊紋や巻藤紋は取りついていなかったとのこと。また、補助大工の松田氏によれば、巻藤紋は修理以前に松田氏が取り付けたものであると述べている。
- 1 8)前掲1 7)
- 1 9)「松平直基公記」 国立国会図書館蔵『大野市史 史料総括編』所収 昭和60年p276に、福井藩祖秀康の時から桐と三ツ葉葵の紋を使用していたことが記されており、特に桐の紋は藩祖秀康からの相伝の紋として大事にされていたことが記されている。また、五七の桐も使用されていたことも合わせ記されている。
- 2 0)『重要文化財松平秀康及び同母霊屋修理工事報告書』 財団法人高野山文化財保存会 昭和42年所収の写真による。
- 2 1)左本柱および前面右控柱は礎盤に接する柱中央部分が埋木されている。大工の細井氏の御話によると、後面左控柱は昭和54年に柱内部を埋木修理したとのことである。大斗や巻斗については、どの部分が修理か確認できなかった。
- 2 2)『片鞆記・続片鞆記』 福井県立図書館福井郷土誌懇談会共編 昭和30年 福井県立図書館 所収
- 2 3)『社寺の国宝・重要文化財等 棟札銘文集成 中部編』 国立歴史民族博物館 平成7年 p90
- 2 4)前掲6)に資料としての棟札に「當寺拾一代賢壽 發起人頭同弟拾二之後住賢明 奉造立表門一字 干時安永九年子四月吉日出生 棟梁志比庄永平寺之番匠玄之源左衛」
- 2 5)『永平寺町史 通史編』 永平寺町 昭和59年所収の「越前国名蹟考」によるp734 「大工玄之源左衛門 ○私伝、道元禪師宋国ヨリ帰朝ノ時、木ノ道ノ工玄之ト伝者渡レリト。永平寺ノ大工ハ玄之カ子孫ニテ、玄之ヲ今ハ名字トシテ玄之ト昌ル他。名勝志」
- 2 6)『福井県史 資料編1 4』 福井県 平成元年の吉岡泰英氏による永平寺門前大工関係建物一覧表21による p282
- 2 7)「越前における大工組織について」 日向 進 京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第3 4号 1986
- 2 8)前掲2 4)
- 2 9)前掲6)「門奉納御屋根棟 安永九子五月吉」
- 3 0)前掲1)所収の「南専寺什物裏書之写」「南専寺歴代」。なお、賢壽、賢明は安永九年棟札(前掲2 4)にそれぞれ拾一代、拾二之後住とあり、一代のずれをみるが、ここでは「南専寺歴代」によった。
- 3 1)建設年代については「萬松山大安寺護国禪寺什物明細帳写 明治3 6年2月 紹二」 松平宗紀氏蔵 松平文庫 福井県立図書館保管による。
- 3 2)前掲3 1)
- 3 3)前掲3 1)及び棟札(前掲2 3)による。
- 3 4)『近世社寺建築緊急調査報告書』 福井県教育委員会 昭和56年
- 3 5)前掲3)に「又破損した旧扉の一部には漆塗或いは金箔張りの箇所さえもありいかに美しく豪華なものであったか想像に余りあるものがある。」とある。
- 3 6)拙著「福井藩主松平家の霊廟建築」『建築年報1994版』 日本建築学会 所収
- 3 7)前掲7) 2社寺建築 吉岡泰英 p9

(平成8年12月3日受理)